

12 四国地方の鬼瓦

岡本 治代

A はじめに

本稿では、四国地方における鬼瓦の文様及び製作技法の特徴を整理するとともに、その展開の様相から推定される鬼瓦の生産・供給体制について検討したい。なお、先行研究において報告されているものの、今回の調査で実見することができなかつた資料については、図面や写真などをもとにその特徴を述べることとする。

B 香川県（讃岐国）

丸亀市法勲寺跡^{ほうくんじ}で蓮華文鬼瓦、高松市讃岐国分寺跡で平城宮式鬼面文鬼瓦、善通寺市善通寺旧境内及び高松市多肥北原西遺跡^{たひ}で南都七大寺式鬼面文鬼瓦が出土している¹。

i 法勲寺跡

蓮華文鬼瓦（第1図1・2） 突線で表現された格子区画の中に、＊状の蓮華文を配する。現存しているのは破片資料だが、安藤文良氏によって第1図2のような上辺が湾曲した横長台形の平面形を呈する復元案が示されている（安藤 1974）。複数の蓮華文を配する点は、韓国忠清南道扶余郡扶余村の扶蘇山廃寺出土の石製瓦との類似が指摘されている（千田 2005）法隆寺若草伽藍出土の蓮華文鬼瓦と共に通している。また、井内潔氏は、法勲寺出土例を、日本列島内における「百濟・三国新羅系棟端飾瓦の遺例」として挙げている（井上 1968）。

側面・裏面にはナデ調整を施す。統一新羅や百濟の出土例は、裏面に把手をつけるが、本資料は残存部が少ないため、把手の有無は判断できていない。

軒瓦との組み合わせと年代 法勲寺跡では、朝鮮半島系の素弁八葉蓮華文軒丸瓦HK 101（第1図3）、川原寺式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦HK 103（第1図4）等の軒瓦が採集されている。蓮華文鬼瓦がこうした軒瓦と同時期のものとすれば、7世紀後半に位置付けられよう。

ii 讃岐国分寺跡

平城宮式鬼面文鬼瓦（第2図1～3・第3図） 縦長のアーチ形の平面形を呈す。抉部は縦長半円形で、両脚部の内側の角を打ち欠いている。平城宮・京瓦編年第Ⅱ期（721～745）

に位置付けられる平城宮IV式Bや、第Ⅲ期（745－757）に位置付けられる平城宮V式Aに類似するが、目の形状など異なる点も認められる。眉間に釘穴をもつ個体（第2図1）と、釘穴をもたない個体（第3図1）が存在する。

側面はナデ調整、裏面は刷毛目調整を施す。断面には粘土を数回に分けて範型に詰めた痕跡が確認できる。焼成は須恵質で堅緻なものと、やや焼きが甘く灰白色～灰黄色を呈するものがある。

軒瓦との組み合わせと年代 讃岐国分寺跡では東大寺式軒平瓦SKH01（第2図4・5）が出土している。SKH01の年代や組み合う軒丸瓦については諸説あるものの、平城宮・京における東大寺式軒瓦の年代観に照らせば、平城宮・京瓦編年第Ⅲ期後半（749－757）に位置付けられる。したがって、同じく第Ⅲ期の平城京V式Aに類似する鬼面文鬼瓦とSKH01が組み合うと考えられる。

iii 善通寺旧境内

南都七大寺式鬼面文鬼瓦（第4図1・2） アーチ形の平面形を呈し、周縁にそって珠文を巡らす。丸い目、大きな鼻をもち、頬や口元が大きく隆起する。範によって成形されているが、目の周りのまつ毛や頬骨の上の鬚などをヘラ描きしている。裏面には、縦位の把手をつける。南都七大寺V式の系譜をひくものと考えられる。側面はナデ調整、裏面は把手をとりつけるために抉れるほど強くなでつけている。1は須恵質焼成、2は土師質焼成である。

軒瓦との組み合わせと年代 1は、平成15年（2003）の発掘調査において調査区北側（A地区）土手状遺構第2層から出土している（善通寺市教育委員会編2004）。上層の1層においては、白鳳期（第4図3）～室町時代に至る瓦が混在した状態で出土しているとともに、第2層については鬼瓦以外の出土資料は報告されていない。さらに、南都七大寺V式の系譜をひくとともに、範型成形の後にヘラで文様を書き足すといった特徴から、平安時代に位置付けたい。組み合う軒瓦は、特定できていない。

iv 多肥北原西遺跡

南都七大寺式鬼面文鬼瓦 周縁には断面方形の突線を一条めぐらし、その内側に珠文を配する。目の輪郭も突線で表現している。焼成は土師質で、橙色を呈する。

本資料は2012年（平成24）の発掘調査において、SD05013-3区から出土したものである。SD501からは10世紀を下限とする土器（須恵器杯・土師質土器煮炊具など）が出土していることから、本資料も平安時代に位置付けたい。SD0501からは素弁八葉蓮華文軒丸瓦（第4図5）などが出土しており、これらと組み合う可能性もある。

▼ 讃岐における鬼瓦の系譜

鬼瓦と軒瓦の組合せ 法勲寺跡では、朝鮮系軒丸瓦（第1図3）や川原寺式軒丸瓦（第1図3）と組み合う可能性がある。讃岐国分寺においては、軒平瓦SKH01と組み合う可能性が高い。善通寺旧境内・多肥北原西遺跡での組合せについては確定できていない。

初現と展開の様相 法勲寺跡の蓮華文軒丸瓦は、百濟・新羅といった朝鮮系の文様で、7世紀後半に位置付けられる。他の寺院へは展開しない。讃岐国分寺跡の平城宮式鬼面文鬼瓦は平城宮瓦編年第Ⅲ期に位置付けられ、讃岐国分寺の創建に伴い、SKH01型式等とともに創出された型式と考えられる。讃岐国分寺跡以外では出土しておらず、在地での展開はみられない。南都七大寺式鬼瓦については、善通寺旧境内、多肥北原西遺跡で平安時代に採用されたものと考えられ、他の鬼瓦と同じく、各遺跡単独で出土している。

C 徳島県（阿波国）

徳島市国府町阿波国分寺跡・名西郡石井町阿波国分尼寺跡・石井廃寺跡・如意寺跡で重圈文鬼瓦、阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡・名西郡石井町石井廃寺跡・如意寺跡・下浦廃寺跡、吉野川市河辺寺跡・川島廃寺跡で大宰府式鬼面文鬼瓦が出土している。また、阿南市立善寺跡では、これらとは異なる鬼面文鬼瓦が出土している。

i 阿波国分寺跡

重圈文鬼瓦（第6図1～3）『新修国分寺の研究』（天羽・一山1987）や『徳島県文化財調査概報告1976年度』（徳島県教育委員会文化課編1978）に掲載されているものの、今回の調査においては実見できていない。周縁に沿って三条の圈線を配する型式（第6図1）と、圈線に加えてこれと直行する帯状の凸線を配する型式（2・3）が存在する。

大宰府式鬼面文鬼瓦（第6図4）顔が大きく欠損するとともに、両脚部も欠く。周縁部に珠文帯をもち、平面形は上辺が湾曲した台形状を呈する。こうした特徴から、後述する阿波国分尼寺跡出土例と同じく大宰府式鬼瓦である可能性が高い。裏面、側面は摩滅しており調整は不明である。焼成はやや軟質である。

軒瓦との組み合わせと年代 重圈文鬼瓦は、重軒丸瓦（第6図7）・重郭文軒平瓦（第6図8）と組み合うものと考えられる。重圈文軒瓦は平城宮瓦編年第Ⅱ期後半（729～745）に位置付けられており、阿波の出土例も8世紀中葉におさまるものと考えられることから、これと組み合う重圈文鬼瓦も同時期のものであろう。

大宰府式鬼瓦については、老司式軒丸瓦の系譜をひく複弁八葉蓮華文軒丸瓦（第6図5）が出土していることから、これと組み合う可能性も想定される。また、同じく大宰府式鬼瓦が出土している河辺寺跡出土瓦（第8図4）の系譜をひく複弁八葉蓮華文軒丸瓦（第6図6）、石井廃寺跡出土瓦（第9図13・14）の系譜をひく複線鋸歯文縁軒丸瓦・軒平瓦（第

6図9・10)が出土しており、これらと組み合う可能性もある。

ii 阿波国分尼寺跡

重圈文鬼瓦 (第7図1) 上辺部右側の破片である。周縁部と平行する帯状の圈線を三本配する。この圈線と直行して二条の帯状の線を配する。少なくとも残存部においては、釘穴は確認できない。粘土板を重ねて成形されており、裏面は積み重ねた粘土板が剥離し、剥離面に刷毛目が残る。側面には削り調整を施す。焼成は須恵質で堅緻である。

重圈文鬼瓦 (第7図2) 左側の脚部の破片である。周縁部の内側に、太い突線一条、細い突線二条を配する。突線の断面は円弧状を呈する。側面はナデ調整、裏面は刷毛調整の後にナデ調整を施す。焼成は須恵質で堅緻である。

大宰府式鬼面文鬼瓦 (第7図4) 『歴史時代の徳島市－阿波の古瓦－』(徳島市教育委員会社会教育課編 1982)に掲載されているものの、今回の調査においては実見できていない。鬼面の中央部の破片である。空豆状の大きな目、大きな鼻をもち、眉間に釘穴を穿つ。頬は大きく隆起し、両端の二本が外反する六本の歯をもつ。

大宰府式鬼面文鬼瓦 (第7図3) 右目周辺の上顎から眉、周縁部にかけての破片である。目は空豆状を呈し、周縁部に細い圈線を二条めぐらす。第7図1に後出する型式と考えられる。裏面に縄叩きを施す。焼成は須恵質で堅緻である。

軒瓦との組み合わせと年代 阿波国分尼寺跡では、国分寺とほぼ同じ構成の軒瓦が出土している。国分寺と同じく、重圈文鬼瓦と重圈文系軒瓦が組み合うものと考えられる。また、大宰府式鬼瓦と老司式、河辺寺系、石井廃寺系の軒瓦が組み合う可能性がある。

iii 河辺寺跡

大宰府式鬼面文鬼瓦 (第9図1) 左側縁部から目、鼻にかけての破片である。大宰府式の鬼面の表現をもつとともに、周縁部に突線をめぐらす特徴から、阿波国分尼寺跡で出土する大宰府式鬼瓦 (第7図3・4) と同型式と考えられる。裏面は摩滅しており調整手法は不明である。側面は欠損している。焼成は須恵質だがやや焼成不良である。

軒瓦との組み合わせと年代 河辺寺跡では、藤原宮式の系譜をひく瓦 (第9図2～4) が出土しており、これらは8世紀前半の年代観が与えられている (清野ほか 2019)。したがって鬼瓦も同様の時期に位置付けられよう。

iv 石井廃寺跡

重圈文鬼瓦 (第9図8) 上端部の破片である。上辺は湾曲し円弧状を呈する。周縁に沿って三条の圈線を配し、圈線と交差する二条の突線を上辺に配する。裏面には刷毛目調整を施す。釘穴や把手などの棟先に固定するための造作は認められない。側面はナデ調整を施し、焼成は須恵質で堅緻である。

大宰府式鬼面文鬼瓦 (第9図9・10・15) 眉上から周縁部にかけての破片 (9)、右目から周縁部にかけての破片 (10)・右脚部の破片 (15) がある。(15) は、『歴史時代の徳島市一阿波の古瓦一』(徳島市教育委員会社会教育課編 1982) に掲載されているものの、今回の調査では実見できていない。眉上の表現や、周縁部に二条の圈線をもつ点は、河辺寺例と共に通しており、同一型式と考えられる。(9) (10) は、裏面には縄叩き、側面はナデ調整を施す。焼成は須恵質で堅緻である。

軒瓦との組み合わせと年代 阿波国分寺における鬼瓦と軒瓦との組み合わせから推定すれば、石井廃寺跡においても重圈文鬼瓦 (第9図8) と重郭文軒平瓦 (第9図12) が組み合うと考えるのが自然であるが、重圈文鬼瓦の裏面に刷毛目調整が施されるのに対し、重郭文軒平瓦は凸面に縄叩きを施しており、調整手法が異なる。裏面調整を重視するならば、重郭文軒平瓦と大宰府式鬼瓦が組み合う可能性もある。いずれの組み合わせとしても、8世紀中葉以降の時期に位置付けられよう。

v 川島廃寺跡

大宰府式鬼面文鬼瓦 (第9図5) 上辺が湾曲した台形状の平面形を呈す。下顎、下歯を欠き、上顎及び上歯牙のみ表現する。空豆形の眼をもち、太い眉を吊り上げ、眉間には釘穴を穿ち、頬は大きく隆起する。周縁には珠文帯をめぐらす。国分寺・国分尼寺出土の大宰府式鬼瓦に比べて小型である。裏面は刷毛目調整を行っており、指頭圧痕も数多く残る。側面はケズリ調整を施し、脚部は未調整である。焼成は須恵質で堅緻である。

軒瓦との組み合わせと年代 胎土・焼成が共通する、複弁四葉蓮華文軒丸瓦 (第9図6) と太宰府式鬼瓦が組み合うものと考えられる。阿波国分尼寺出土の大宰府式に比べて、顔の立体感が失われており、国分尼寺のものに後出する型式と考えられることから、8世紀中葉以降の時期に位置付けたい。

vi 如意寺跡 (第8図1)

重圈文鬼瓦 『歴史時代の徳島市一阿波の古瓦一』(徳島市教育委員会社会教育課編 1982) に報告されているものの、実見できていない。右側上端部の破片である。上辺は湾曲し円弧上を呈する。周縁に沿って三条の圈線を配し、上辺に圈線と交差する二条の突線を配する。

軒瓦との組み合わせと年代 如意寺跡では、国分寺・国分尼寺と同じく第6図6と同範の軒丸瓦と、国分寺・尼寺の出土例とは異なる型式の重郭文軒平瓦が出土しており、これらと組み合うものと考えられる。8世紀中葉に位置付けられよう。

vii 下浦廃寺跡

大宰府式鬼面文鬼瓦 『歴史時代の徳島市一阿波の古瓦一』(徳島市教育委員会社会教育課

編 1982) に報告されているものの、実見できていない。石井廃寺跡出土例と同型式と考えられる。下浦廃寺跡では、複線鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦が出土しているとされており、これらと組み合うものと考えられる。8世紀中葉以降の時期に位置付けられよう。

viii 立善寺跡

鬼面文鬼瓦 上顎の右端部分から周縁部にかけての破片である。口端にしわを寄せ、上顎は強く外に反らせる。徳島県内で出土している鬼面文鬼瓦の牙は外反するが、本資料は内側に延びる。また、口周りに巻毛をもつなど、他の鬼面文軒丸瓦とは異なる特徴が認められる。具体的な文様系譜については判断できないものの、他の徳島県内出土例とは異なる型式と考えられる。残存部が少なく、軒瓦との組み合わせも不明である。

ix 阿波における鬼瓦の系譜

鬼瓦と軒瓦の組み合わせ 重圏文鬼瓦と重圏文軒丸瓦・重郭文軒平瓦が組み合うことは間違いないが、大宰府式鬼瓦については、複線鋸歯文縁軒丸瓦・軒平瓦、複弁八葉蓮華文軒丸瓦、老司式軒丸瓦、といった複数の組み合わせが想定され、特定するには至っていない。立善寺跡の鬼面文鬼瓦についても、組み合わせを判断できていない。

初現と展開の様相 重圏文鬼瓦は、重圏文軒丸瓦・重郭文軒平瓦とのセット関係から、国分寺創建を契機として国分寺・国分尼寺で採用され、その後石井廃寺跡、如意寺跡に展開したものと考えられる。大宰府式鬼瓦についても同様に、周縁部に珠文や立体的な鬼面の表現といった本来の大宰府式の要素を備えた国分寺・国分尼寺出土例（第6図4・第7図4）を初現として、周縁に圏線をもつ大宰府式（第7図3・第8図2・第9図1・9・10・15）が、国分尼寺跡・石井廃寺跡・下浦廃寺跡・河辺寺跡に、鬼面の表現がやや平面的小型の大宰府式（第9図2）が川島廃寺跡に展開したものと考えられる。

D 高知県（土佐国）

南国市比江廃寺跡で幾何学文鬼瓦が出土している²。

i 比江廃寺跡

幾何学文鬼瓦（第5図1） 上辺が湾曲した横長台形の平面形を呈する。両脚部は欠損している。範型でひし形の珠文を造り出した後に、沈線で格子状の区画を設定している。格子状の区画の中に円形の文様を配する点は、讃岐法勧寺跡の蓮華文鬼瓦（第1図1）に類似している。側面は摩滅しており、裏面はナデ調整で指頭圧痕が残る。橙色を呈し、土師質焼成で堅緻である。

胎土、色調は、土佐国分寺跡と同範の单弁八葉蓮華文軒丸瓦（第5図4）と類似しており、これが組み合うとすれば、国分寺創建以降の8世紀中葉～後半のものと考えられる。

E 愛媛県（伊予国）

伊予国分寺跡、法安寺跡で鬼瓦が出土したといわれている³が、今回の調査では実見できていない。伊予国分寺跡では、1968年（昭和43）に実施された発掘調査において、南面回廊と推定されている回廊の南側の溝から鬼面文鬼瓦が出土したとされる（愛媛県教育委員会1968、吉本1986b）。また、法安寺跡でも、鬼面文鬼瓦が出土したとされる（吉本1986a、西田1987）。しかし、いずれも、写真・図面を確認できておらず、具体的な文様は不明である。

F まとめ

以上のように、讃岐においては法勲寺跡で新羅・百濟系蓮華文鬼瓦、讃岐国分寺跡で平城宮式鬼瓦、善通寺旧境内・多肥北原西遺跡において南都七大寺式鬼瓦、阿波においては阿波国分寺・国分尼寺跡及びその周辺寺院で重圈文鬼瓦・大宰府式鬼瓦、土佐においては比江廃寺跡で幾何学文鬼瓦が出土している。また、伊予においては、伊予国分寺及び法安寺で鬼面文鬼瓦が出土したとされる。

讃岐国分寺・阿波国分寺跡の鬼瓦は、現時点では国分寺の創建を契機として採用されたものと考えられる。讃岐においては、国分寺以外の寺院に採用されないのでに対して、阿波においては周辺寺院にも展開している。これは軒瓦の様相とも一致しており、讃岐においては、たとえば東大寺式軒平瓦SKH01が基本的には讃岐国分寺・国分尼寺以外では出土していないのに対して、阿波においては、国分寺創建期に導入された重郭文軒平瓦が国分寺・尼寺以外の周辺寺院でも出土しており、在地寺院と国分寺の瓦生産において有機的な関係が認められる（岡本2017）。このことから、阿波においては、鬼瓦と軒瓦の生産・供給が一体的に進められた可能性も想定される。

（徳島県立博物館）

謝辞

本稿を作成するにあたり、下記のみなさまに資料調査・文献収集にご協力いただくとともに、多くのご教示を賜りました。記して深謝申し上げます。

阿南市、石井町教育委員会、高知県立埋蔵文化財センター、高知県立歴史民俗資料館、西条市教育委員会、善通寺市教育委員会、高松市文化財課、童学寺、徳島県立埋蔵文化財総合センター、徳島市教育委員会、徳島市立考古資料館、南国市教育委員会、法勲寺、吉野川市教育委員会、壱岐一哉、一山 典、大栗美菜、岡本桂典、香川将慶、久家隆芳、塩田龍澄、白石 聰、鈴木 圭、松浦暢昌、松林玲美、宮城一木、向井公紀、村田昌也、山

下英郎、油利 崇（機関・個人の順、五十音順、敬称略）

註

- 1 この他に、讃岐国分尼寺跡で鬼面文鬼瓦（渡邊編 2017：第 107 図）が出土しているが、中世以降の資料である可能性もあるため、本稿においては取り上げなかった。
- 2 『秦泉寺廃寺跡－第 3 次発掘調査』（宅間ほか編 1984）で、鬼瓦として紹介された資料は、鷲尾と考えられる。別稿において鷲尾として報告している（香川ほか 2020、岡本 2020）。
- 3 『古代寺院の出現とその背景』において、今治市中寺廃寺で「棟端瓦」が報告されており、鷲尾もしくは鬼瓦の破片とされている（谷若 1997）が、正段型の鷲尾と考えられることから、本稿では取り上げていない。

参考文献

- 秋山英一 1968 「文部省指定史跡 法安寺址の礎石と古瓦」『愛媛の文化』第 8 号 愛媛県文化財保護協会
- 天羽利夫・一山 典 1987 「第三 阿波」『新修国分寺の研究』第 5 卷上 南海道 吉川弘文館
- 安藤文良編 1974 『古瓦百選（讃岐の古瓦）』 飛鳥書房
- 石井町教育委員会 2013 『河波国分寺跡Ⅲ』 石井町教育委員会
- 井内 潔 1968 「新羅棟端飾瓦の展望」『鬼面紋瓦の研究』 井内古文化研究室
- 岩戸晶子 2001 「奈良時代の鬼面文鬼瓦－瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷－」『史林』第 84 卷第 3 号 史学研究会
- 愛媛県教育委員会 1968 「特集伊予国分寺発掘調査概要 付 伊予国分寺出土古瓦考」『愛媛の文化』第 8 号 愛媛県文化財保護協会
- 愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1989 『甦る埋蔵文化財第 3 集 史跡法安寺跡 本文編』 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 愛媛県埋蔵文化財調査センター編 1989 『甦る埋蔵文化財第 3 集 史跡法安寺跡 資料編』 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡本治代 2014 「阿波国分寺・国分尼寺出土瓦の文様系譜と製作技法」『高知人文社会科学研究』創刊号 高知人文社会学会
- 岡本治代 2016 「童学寺所蔵の石井廃寺跡出土瓦」『青藍』第 11 号 考古フォーラム蔵本
- 岡本治代 2017 「阿波国分寺創建期の造瓦組織」『地方史研究』第 67 卷第 4 号 地方史研究協議会
- 岡本治代 2020 「四国の鷲尾－伊予・阿波・土佐を中心に－」『徳島県立博物館研究報告』第 30 号 徳島県立博物館
- 香川県埋蔵文化財センター編 2015 『多肥北原西遺跡』 香川県教育委員会
- 香川将慶編 2020 『特別史跡讃岐国分寺跡 I – 保存整備事業に伴う発掘調査報告書－遺物編②』 高松市教育委員会
- 香川将慶・妹尾周三・岡本治代・白石純 2020 「山陽・四国地方の鷲尾」『古代瓦研究会第 20 回シンポジウム発表要旨』古代瓦研究会
- 高松市歴史資料館編 1996 『讃岐の古瓦展』 高松市歴史資料館
- 国分寺町教育委員会編 1996 『特別史跡讃岐国分寺跡保存整備事業報告書』 国分寺町教育委員会
- 清野孝之・藤川智之・松林玲美・岡本治代 2019 「藤原宮式軒瓦からみた阿波・讃岐東部の交流の一様相」『真朱』第 12 号 徳島県埋蔵文化財センター
- 妹尾周三 2017 「讃岐国分尼寺の創建期軒瓦とその特徴について」『史跡讃岐国分尼寺跡－第 7 次～14 次確認調査－』 高松市教育委員会
- 善通寺市教育委員会編 2004 『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9 菊塚古墳・善通寺旧境内・善通寺陣所跡・旧練兵場遺跡』 善通寺市教育委員会
- 善通寺市教育委員会編 2014 『旧練兵場遺跡・王墓山古墳・岡古墳群・善通寺旧境内』 善通寺市教育委員会
- 千田剛道 2005 「法隆寺若草伽藍出土の鬼瓦と百濟」『奈良文化財研究所紀要 2005』 奈良文化財研究所
- 宅間一之・山本哲也編 1984 『秦泉寺廃寺跡－第 3 次発掘調査』 高知市教育委員会

谷若倫郎 1997 「中寺廃寺（石中寺？）」『第42回埋蔵文化財研究集会 古代寺院の出現とその背景』埋蔵文化財研究会第42回研究集会実行委員会

徳島県教育委員会文化課編 1978 『徳島県文化財調査概報 1976年度』徳島県教育委員会

徳島県立博物館編 2017 『瓦から見る古代の阿波－寺院と役所－』徳島県立博物館

徳島県埋蔵文化財総合センター編 2006 『尼塚古墳・カニ塚古墳 池谷宝幢寺古墳 河辺寺跡 重清城跡合蔵廃寺跡遺跡』徳島県教育委員会

徳島市教育委員会編 1981 『阿波国分寺跡第3次調査概報－1980年度』徳島市教育委員会

徳島市教育委員会社会教育課編 1982 『歴史時代の徳島市－阿波の古瓦－』徳島市教育委員会

西田 栄 1987 「第五伊予」『新修国分寺の研究』第5巻上 南海道 吉川弘文館

廣田佳久 2007 『比江廃寺跡Ⅲ』高知県文化財団埋蔵文化財センター

松本忠幸 2009 「出土瓦から見た讃岐国分寺の創建」『仏教芸術』303号 毎日新聞社

松本忠幸 2015 「古代の讃岐国分寺・国分尼寺について」『仏教芸術』339号 每日新聞社

森田尚宏編 1991 『比江廃寺跡発掘調査概報』高知県教育委員会

毛利光利彦 1980 「日本古代の鬼面文鬼瓦－8世紀を中心として－」『研究論集 VI』奈良国立文化財研究所

毛利光彦・花谷 浩 1991 「考察 屋瓦」『平城宮発掘調査報告 X Ⅲ』奈良国立文化財研究所

八木久栄 2010 「後期難波宮の屋瓦をめぐって」『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』財団法人大阪市文化財協会

山本忠尚 1998 『鬼瓦』日本の美術 391号 至文堂

吉野川市教育委員会 2016 『川島廃寺跡』吉野川市教育委員会

吉本 拡 1986 a 「法安寺」『愛媛県史』資料編 考古 愛媛県

吉本 拡 1986 b 「伊予国分寺跡」『愛媛県史』資料編 考古 愛媛県

渡部明夫 2013 『讃岐国分寺の考古学的研究』 同成社

渡部明夫 2018 『讃岐地域の東大寺式軒瓦』『古代瓦研究 VI』奈良文化材研究所

渡邊 誠 2014 「四国地方の重圈文一重郭文軒瓦」『古代瓦研究 VI』奈良文化財研究所

渡邊 誠編 2017 『史跡讃岐国分尼寺跡－第7～14次確認調査－』高松市教育委員会

渡邊 誠編 2018 『特別史跡讃岐国分寺跡 I－保存整備事業に伴う発掘調査報告書－遺構編』高松市教育委員会

図版出典

第1図1・3・4：高松市歴史資料館編 1996。

第2図1～3：香川編 2020。4～6：渡邊編 2018。

第3図：香川編 2020。

第4図1平面図：善通寺市教育委員会編 2004。断面図：筆者作成。3：善通寺市教育委員会編 2004。2：善通寺市教育委員会編 2014。4：香川県埋蔵文化財センター編 2015。

第6図1：徳島県教育委員会文化財課編 1978。2・3：天羽・一山 1987。

第7図4：徳島市教育委員会社会教育課編 1982。

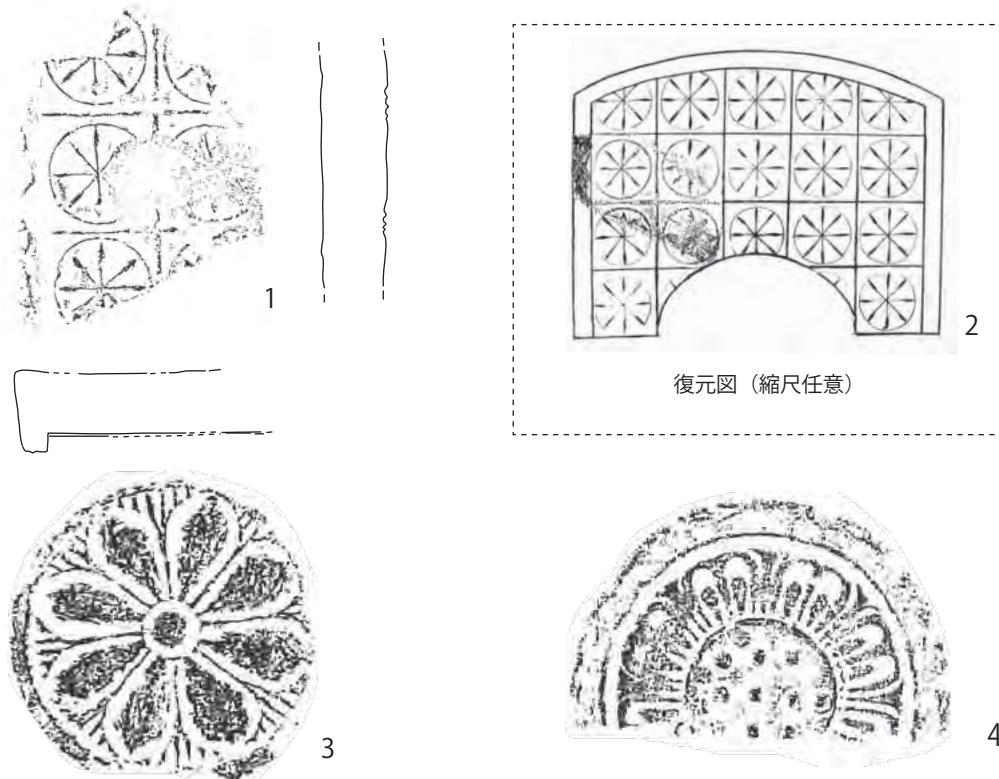
第8図1・2：徳島市教育委員会社会教育課編 1982。

第9図1：徳島県埋蔵文化財センター編 2006。2～4：清野ほか 2019。5～7：吉野川市教育委員会編 2016。15：徳島市教育委員会社会教育課編 1982。

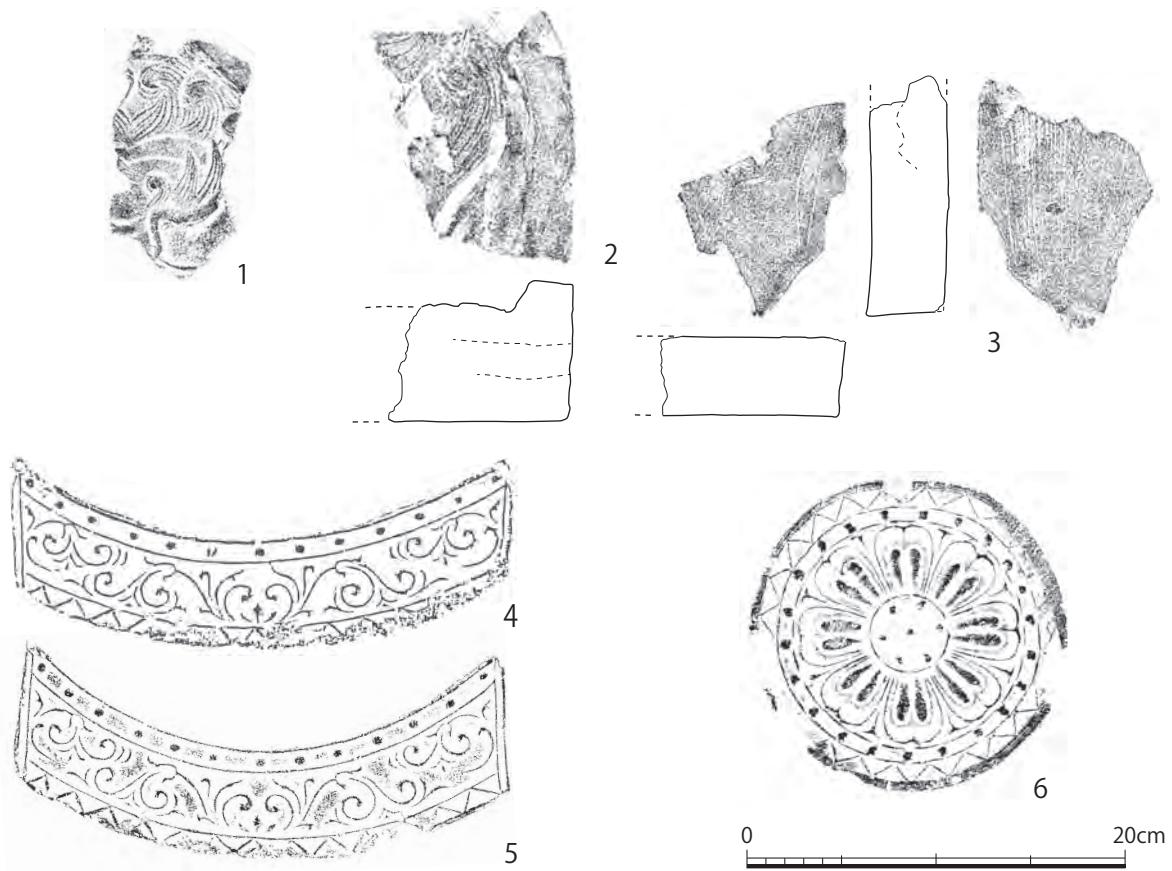
※ いずれも断面図は筆者が再トレースした。また、上記以外の図版は筆者が作成した。

資料所蔵機関

法勲寺跡：法勲寺・個人。讃岐国分寺跡：高松市文化財課。善通寺旧境内：善通寺市。多肥北原西遺跡：香川県埋蔵文化財センター。比江廃寺跡：高知県立歴史民俗資料館・高知県立埋蔵文化財センター。川島廃寺跡：吉野川市教育委員会（徳島県立博物館保管）。河辺寺跡：徳島県立埋蔵文化財総合センター・個人。石井廃寺跡：童学寺。阿波国分寺跡：徳島市教育委員会。立善寺跡：阿南市



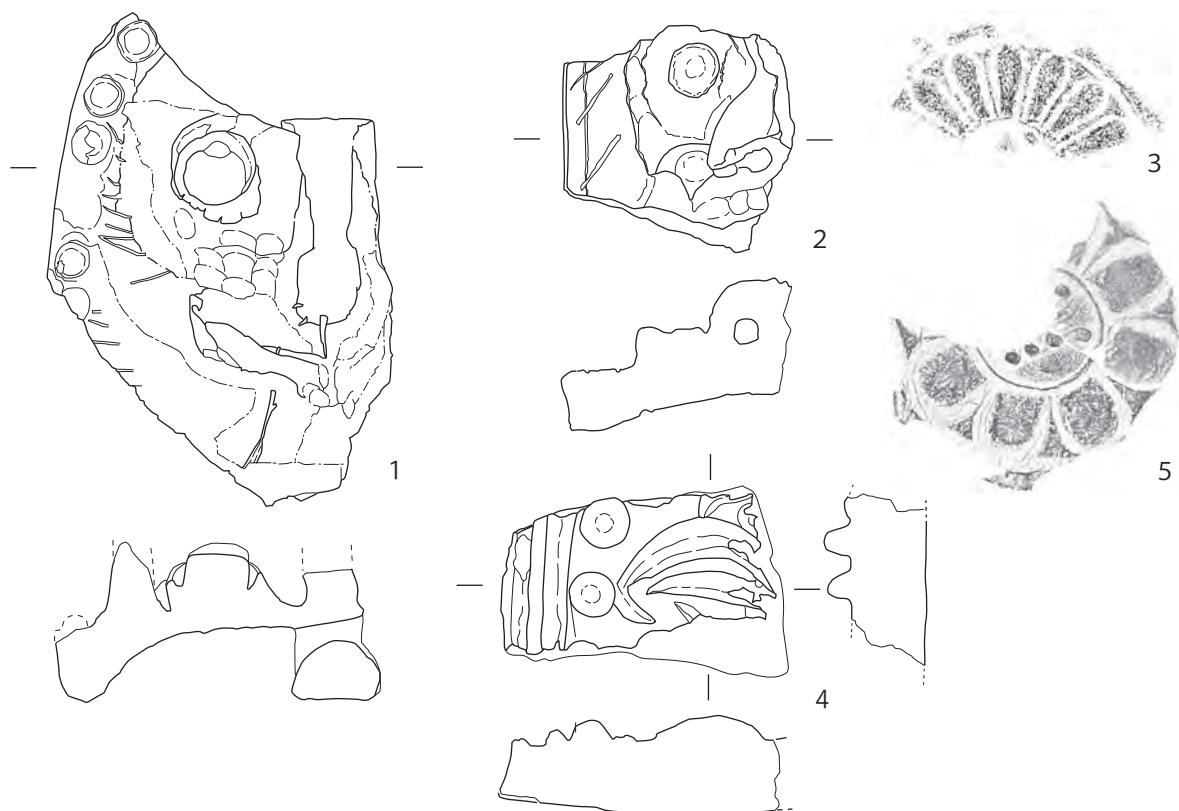
第1図 法勲寺跡出土瓦 (1:4)



第2図 讃岐国分寺跡出土瓦 1 (1:4)

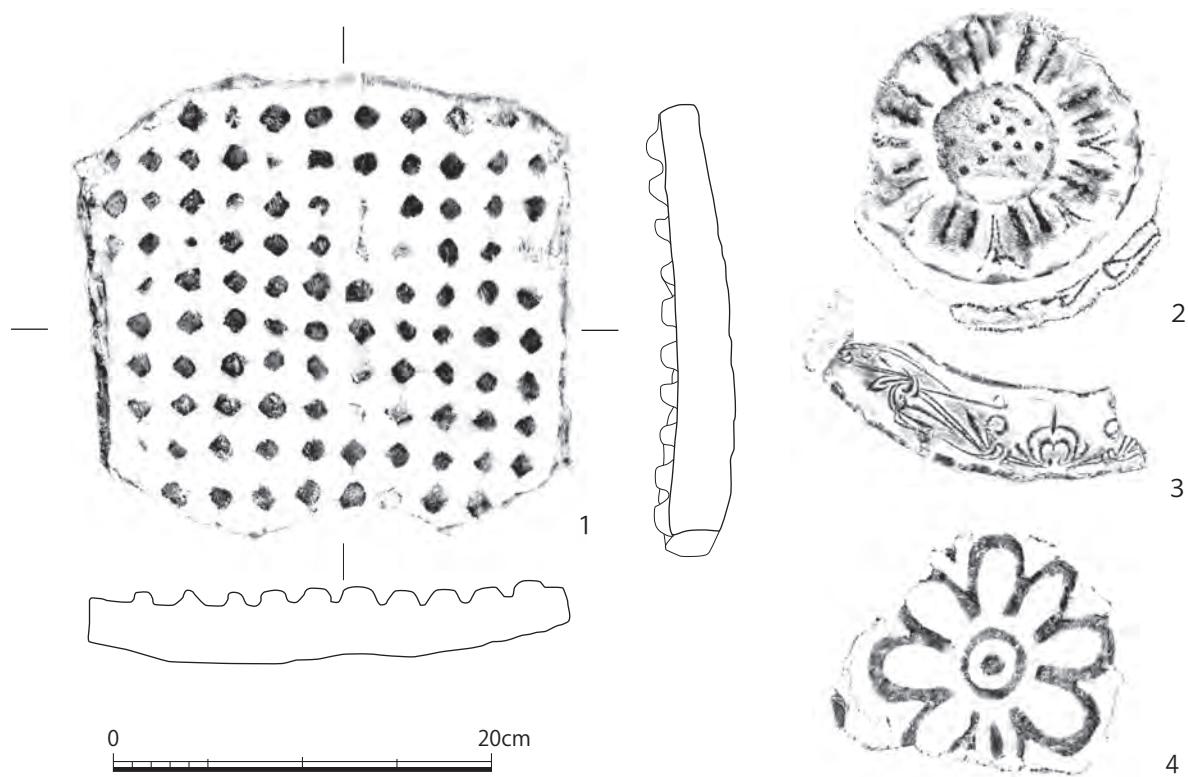


第3図 讀岐国分寺跡出土瓦 2 (1:4)

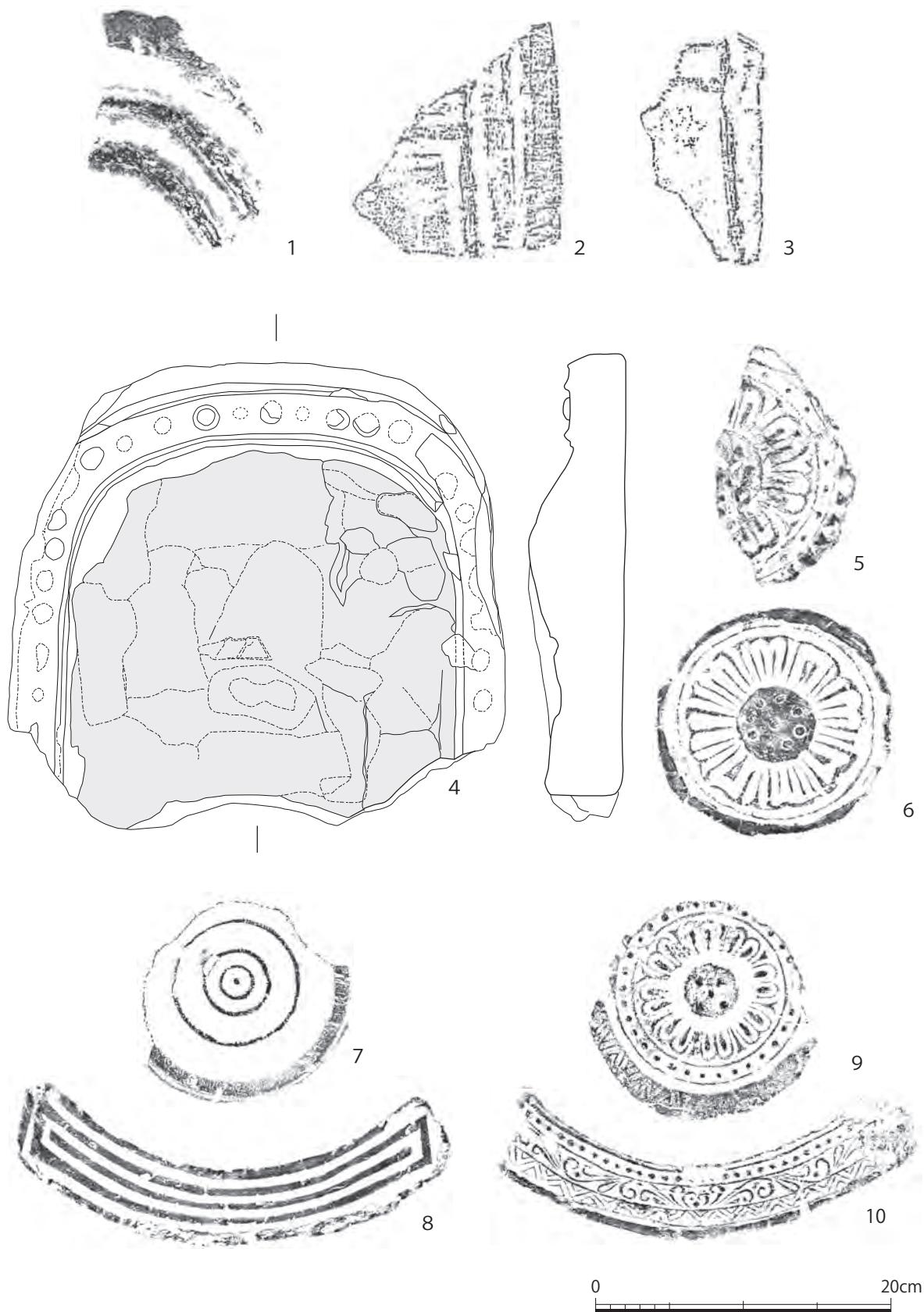


第4図 善通寺跡・多肥北原西遺跡出土瓦 (1:4)

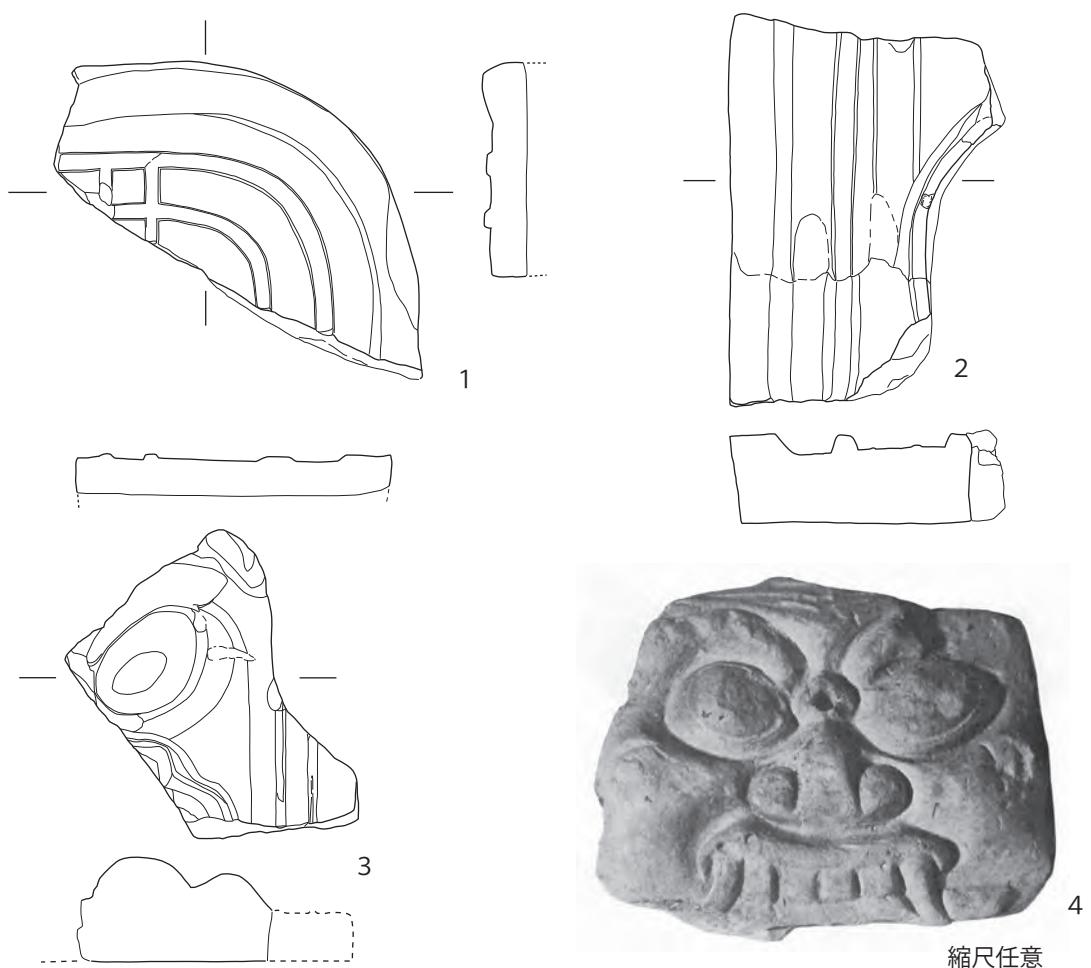
(1~3:善通寺跡 4・5:多肥北原西遺跡)



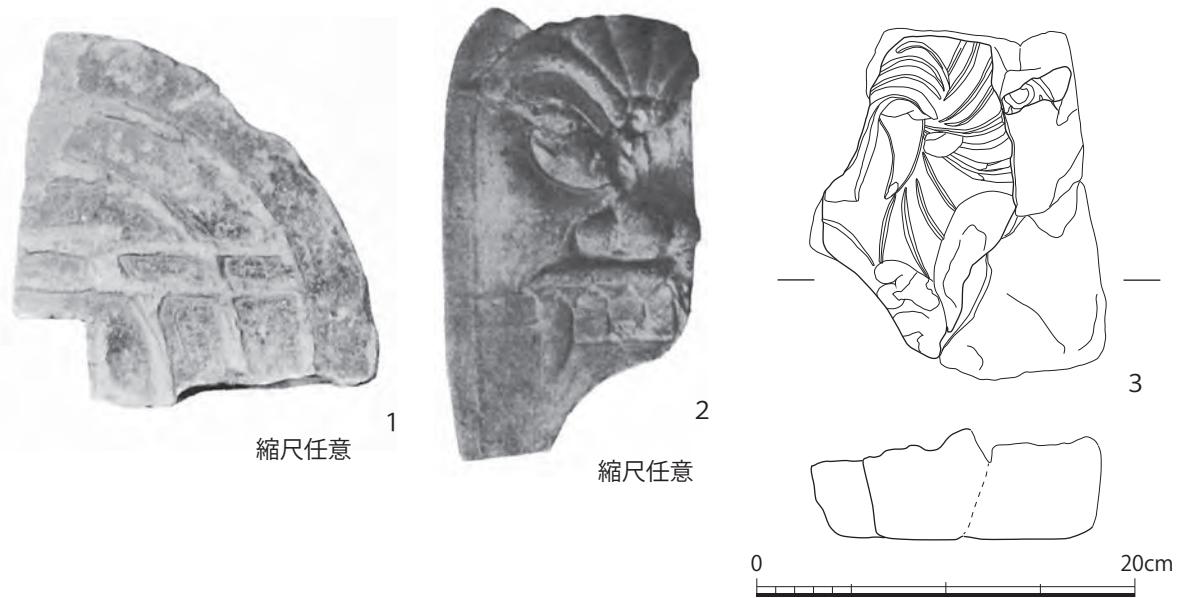
第5図 比江寺跡出土瓦 (1:4)



第6図 阿波国分寺跡出土瓦（1～4は縮尺任意 5～10は1：4）

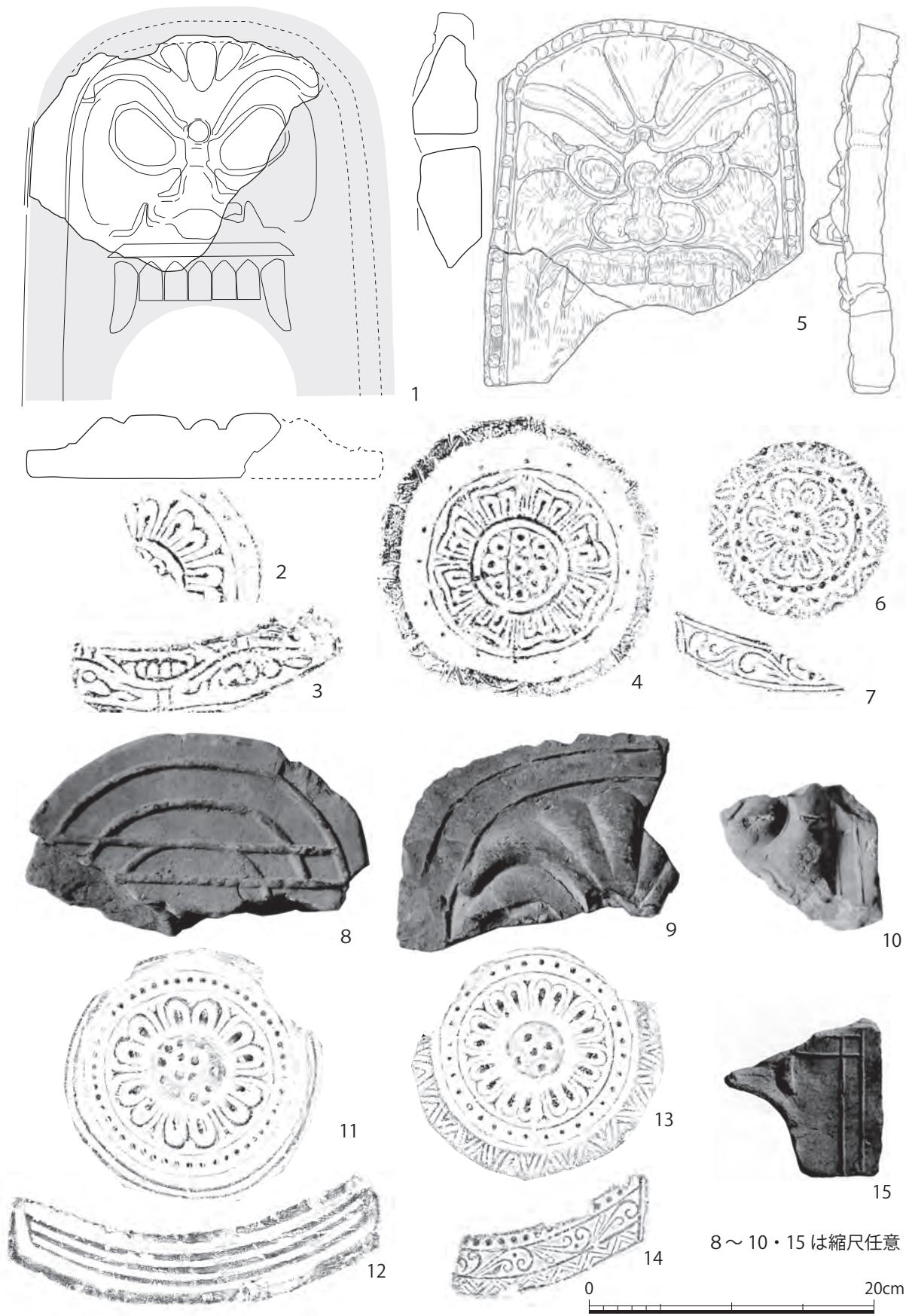


第7図 阿波国分尼寺跡出土瓦 (1:4)



第8図 如意寺跡・下浦廃寺跡・立善寺跡出土瓦 (1:4)

(1:如意寺跡 2:下浦廃寺跡 3:立善寺跡)



第9図 川島廃寺跡・河辺寺跡・石井廃寺跡 (1:4)
(1~4: 河辺寺跡 5~7: 川島廃寺跡 8~15: 石井廃寺跡)